

～「わが人生に悔いなし」～

日本臨床皮膚科医会

前・東海北陸ブロック長

田中隆義先生を偲ぶ

名古屋皮膚科懇談会 白田俊和

ご自宅で御家族に見守られながら、「わが人生に悔いなし」というお言葉とともに、平成29年2月7日の早暁に息を引き取られたと、ご遺族からお聴きしました。まことに先生のお人柄とこれまでの生き方を、如実に表したお言葉であったと思います。

田中先生は、クリニックの診療とお酒（殊にビール）をこよなく愛されていましたが、名古屋の中心的繁華街である栄で生まれ育ったことが関係しているのかもしれませんが。名古屋の高名な皮膚科医であった父親の意志を継いで、皮膚科医となるべく昭和46年に日本医科大学を卒業。名古屋第一赤十字病院での臨床研修を経て名古屋大学皮膚科学教室に入局され、過酸化脂質の皮膚障害のテーマで博士号を取得し、昭和55年からは名鉄病院皮膚科へ医長として赴任されました。名鉄病院時代には皮膚科臨床医の力を遺憾なく発揮され、CHILD症候群の本邦第一例を報告（皮膚病診療、4：143、1982）されたほか、パッチテスト研究会（後に接触皮膚炎学会へと発展）の中心的なメンバーとしてもご活躍されていたことが、つい昨日のこのように思い出されます。昭和57年から名古屋駅前のオフィスビルで、念願であった「タナカ皮膚科」を開設されたのですが、名駅地区の近年の目覚ましい発展・繁栄ぶりを眼にするにつけても、田中先生の先見の明が確かであったことに、今更ながら感心しています。クリニックの診療におかれましても、地域と密着した臨床皮膚科医を目指すという信念とともに、愛知県皮膚科医会の「皮膚の日」担当理事を長年に亘り務められて来ました。「皮膚の日」の催しを、毎年11月の皮膚の日に合わせて盛大に開催することができたのは、先生のお人柄とご尽力抜きでは語れないものであり、如何に存在感が大きなものであったかを、あらためて感じているのは私だけではないものと思います。

日臨皮においては、平成16年より理事、平成22年からは東海北陸ブロック長に就任され、第29回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会（平成25年4月）の会頭を務められました。大会の構想や準備に忙しかった1年ほど前には、すでに病魔と闘っておられたことを考えると、天の無情を感じずにはおられません。そのような状況下においても、先生の気力と人徳に加え、日臨皮会員の

方々のご協力により、29回大会を盛況のうちに無事開催することができましたことが、冒頭のお言葉とも結びついているのではないかと思います。

私が田中先生と初めてお会いしたのは昭和40年代末頃のことです。名古屋皮膚科懇談会の前身であった研修病院連絡会と称する勉強会の場でした。勉強会や地方会の終了後には、しばしば先生からお誘いを受けて、栄や錦の繁華街へと出掛けましたが、「知らない店はないのではないか？」と思えるほど飲食店（とくに気楽な店）をよくご存知で、いつも感心したことを覚えています。

田中先生との並々ならぬご縁を感じるものの一つは、本邦第一例のCHILD症候群の患者さんは、報告後から長い間消息不明であったのですが、小学生になった頃に偶然にも私の勤めていた中京病院皮膚科を受診されたのです。そのことをご連絡したところ、びっくりされつつも大変喜ばれていました。数回の植皮術で皮膚症状をかなり改善することができましたので、連名で小児皮膚科学会において発表させて頂きましたが、中学を卒業したころから再び受診は途絶えてしまいました。その後10年ほど経過したときですが、田中先生のご子息が中京病院皮膚科で働き始めた際に、奇しくもその患者さんが再び受診されたので、何かしらの不思議な縁があるのを感じています。

先生は亡くなられる1カ月ほど前までは、クリニックの診療を午前、午後ともにご自身でしっかりと続けられており、クリニックへの強い愛着を示されてきました。先生亡き後にご意志を引き継ぐべく、生前にお世話になった皮膚科医を中心メンバーとして、現在も従来と変わらずに「タナカ皮膚科」は診療を続けており、私も微力ながら週2回ほど診療のお手伝いをさせて頂いています。クリニックの休憩室で微笑む先生のお写真に見守られながら、これからもタナカ皮膚科の灯が絶えることなく輝き続けていくことを願いつつ筆を置かせていただきます。

合掌

